第六十回 怪談文芸研究会

二〇二一年二月二十七日 於zoom 門脇大

江戸怪談の〈追う女〉

女霊の江戸怪談

〈追う女〉〜 『東海道四谷怪談』(お岩)、 「道成寺縁起」 (清姫)、

『雨月物語』「吉備津の釜」「蛇性の淫」

* 〈蛇と化す女〉

〈待つ女〉 『雨月物語』 「浅茅が宿」

<通う女>「牡丹燈籠」(露)、「子育て幽霊」

〈憑く女〉 「累ヶ淵」 (累)

<崇る女>「皿屋敷」(お菊)

*『奇異雑談集』巻二の二・『曾呂利物語』巻三の四・『諸国百物語』巻二の一・同一の十 学・発表者:門脇) 三は、第六回怪談文芸研究会(二〇一五年三月十三日・於京都精華大学・発表者:門脇)、 『曽呂利物語』巻四の九は第十回怪談文芸研究会 の再掲。 (二〇一五年七月七日 於京

『奇異雑談集』(天文年中<一五三二~五五>成・貞享四年<一六八七>刊)

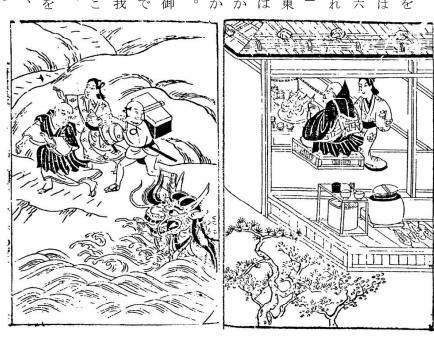
巻二の二「糺の森の里、胡瓜堂由来の事」

なり。地下 (在地民の町。) 五、六町繁盛し、 ゆへに、人の往来絶ゆることなし。 ばば (境内。) ひろし。 はく保境 (境内。) ひろし。 の森(京都市左京区、 下鴨神社の森。賀茂・高野両川の合流点にある。)はむかし、 社頭いらかを磨き、 民家おほく連なる。 神威霊験あらた(あらたか。 叡山より 出京の街道なる いちじるしい。) 大木お

である感情を形づくること。執心の発端。)。 おもひ、ややいやましにして、 道して帰るが、「めづらしき胡瓜あり」とて寄りてみる。ひとりのわらは、手に胡瓜をと 表に板をもつて、 いふて、棚に置きて、 りて、「わが坊の坊主のわたくし物(男根。)は、ただ是よ。かたちも此のやうなるぞ」と 一、二年ひとりやもめなり。 地下の西寄りに、綺麗にして、大きなる家あり。茶家なり。家ぬしは婦人にして夫なし。 一の方便をえたり。 かりに棚をつりて、胡瓜五、六を出して売る。 三人わらひてゆけり。 つねに茶屋の本座(店の主人の坐る場所。)に居て、茶をうる。 内婦聞きて心を動かし、 山の小法師ばら三人、同 念をむすぶ(心の中 思案工夫するゆへ

内婦目を放たず街道を見て、 三人の小法師ばら、 京に入りて、 小法師ばらの帰るを待つ。 おもひおもひの用を弁ずるゆへに、 かの胡瓜、 手にとりし寺童、一ちに、帰路は各々なり。

四間の座敷に押板(床の間。)あり。 見給へ」といへば、寺童行きて見れば、 あるべし」といふ。 出であるべきや」「なかなか、 谷)、横川(六谷)の三塔十七渓に分けられ 通り行くをみて、 七日の護摩を行ひたく候。 なか。いづかたへも御出で候」といふ。 たへも御出で候や」といへば、 と問へば、寺童の ており、 地理的に区分して、 々年久しき立 「ここもとの、見ぐるしき所へも、御 物申すべき事あり」とて、 がんだて。がんかけ。)の事候ひて、 「御坊様は祈禱のために、 正覚坊に候」とこたふ。婦の その中に僧坊がある。)の 東塔 (五谷)、 内婦これをよびて、 (神仏に祈願を立てるこ いはく、「東塔の東 婦のいはく、「我 奥の座敷を 先づ茶を 御出で 人ぞ」 「なか づか



てくばり。)なり」といふ。 次は三間、 また三畳敷なり。 「護摩もしかるべき手番ひ (手遣 (てづか) いに同じ。 手はず。

からば明日御供申し、 由を申す。 「然らば、 方法。)、 寺童、「心得申す」とて、 その方を頼み入れ候」 内婦喜んで、また飯酒すすめ、引物 談合す。「御坊へうかがひありて、 まゐるべく候」とて帰る。 山にかへりゆき、その翌日、かの寺童きたりて、御領、うかがひありて、明日の便宜に、御左右承りたく候」ないひて、飯酒すすむ。七日の朝夕布施の様体れ候」といひて、飯酒すすむ。七日の朝夕布施の様体ようだ。 いんぶ (いんもつ。 進物。 贈り物。)を与ふ。

あしばやに歩く。 給ふを見て、 (共寝しようと。) すれども、 (雑務にあたる身分の低い僧。 そのあけの日、 内婦の気色を怪しく思ひ給ひて、暇乞ひもせず門に出で給ふ。内婦、門送りに出でて、 きたりたる衆、 なほ袖にとりつくを、 導師が礼拝を行う台。らいはん。) 等をになひ、 御坊の御身近く、 横臥しし給はず、 婦人おほきに忿りて、 かの寺童、 中方、小者寄りて、「左様にはなき事ぞ、 すこしも油断なく、燈明をこたらず、 法事執行のさい助手の役をはたす。 寄りて行くほどに、 本尊の絵箱、護摩の檀、 取り寄るべきやう、 みな押さへて、 気色変じ、 走りゆき給へば、婦もまた走らんとするを、 恐ろしく凄じくなりて、 引き留むれば、 御坊あしばやに歩き給へば、 更になくして、 持ち来たる。 仏具の箱、 なかかた。中坊。)一人、小者一 しりぞけ」とい 御坊ははるかに行き去り あとに御坊、 ごま木、 勤行看経 七日すでに終はれり。 引きおとさんと ・〜ども、 のほとりに池 (経文を誦読す ただ中 (本尊の前 婦もまた もち 御迎

水ありしに、 飛び入りて、たちまち大蛇となる。諸人集まりて、 見る事群をなせり。

るなり。応仁の乱中に、 悪業、蛇体変作の罪障を弔ふなり。此の堂、胡瓜より事おこるゆへに、胡瓜堂となづく墓石に使われる。)をもつて堂をつくり仏像を安置し、香花をそなへて、かの婦人の、執心 土を集めて池を埋め、蛇をうづみて、 「是ただ事にあらず」といふて、 津田紹長(不詳。泉州堺の茶人津田宗及の関係者か。)、 兵は武器、 地下民家、退転すといへども、 革はよろい・かぶとの類。)を帯して大蛇を退治す。 ふなり。 地下より管領へ注進申せば、 そのうへに堂をたつ。きりいし(花崗岩。みかげいし。 石の堂はのこりて今にあり。 叡山にて聞くといへり。 人数きたり、兵革 殺しおはつて、 此の

*掲載画像は、高田衛・有働裕・佐伯孝弘編『西鶴と浮世草子 研究 高田衛編・校注『江戸怪談集(上)』(岩波書店、一九八九年)。注は()内に記した。以下も同じ。 特別附録Cによった。 断らない限り、 画像は以下も同じ。 第二号』(笠間書院、二〇〇七年)

▼『曾呂利物語』(寛文三年<一六六三>刊)

巻三の四「色好みなる男、見ぬ恋に手をとる事」

にも気高き音声 けるが、小夜更け方でさまざまに歓待し、 京より北陸道を指して、 声にて、 (小夜更け方・夜ふけ頃。) に、 奥の間に請しまう 小唄を唄ひけり。 下る商 じ入れけるが、 人ありけるが、 次の間に如何なる者とは知らず、 ある宿に泊まり侍るに、亭主、 連れも無く、すごすごと臥して居たり 心あり 何

思議のもの る人にて御入り候へば、是れへ御越しありて」とて、傍近く寄りたれば、女の声にて、「奥な人にて御入り候へば、これがは、おいまし、そばらが、 の間には誰れ さても斯様の面白き事は、都にても未だ聞かざる声音なり、 よいなよやかに臥したる御姿、なよやかに臥したる御姿、 かなと、 も坐せぬと思ひ、 いとど(いとど・ひとしお。 片腹痛き事どもを申し、返す返すも御恥づかしく候かたはらいた 一層。) 寝覚めて、 次の間に行き、「如何な 斯かる田舎にては不

れ、「これに不思養こりな。左様に宣はば、まやトニー、寄らぬ事を承り候ふものかな。左様に宣はば、まやトニー、寄らぬ事を承り候ふものかな。左様に宣はば、まやトニー、 ふやう、「寔」 京の北部の地名。)の御結がままり に左様に思し召さ び合はせにてこそ候はめ」と、 出雲路(出雲路・出雲路の神の略。縁結びの神。出雲路はいずもじに宜。はば、はや外に出でなん」と行く。男いとど憬っ いろいろ言ひ、 恨みければ、 「是は思ひも 女言

に我が国に伴ひ侍らん」と云ふ程 は、 をしからず」と云へば、あらゆる としからず」と云へば、あらゆる としからず」と云へば、あらゆる としからず」と云へば、あらゆる としからず」と云へば、あらゆる としからず」と云へば、あらゆる としからず」と云へば、あらゆる としからず」と云へば、あらゆる をしからず」と云へば、あらゆる としからず」と云へば、あらゆる



流石岩木ならねば打ち解けて、妹背の契り浅からず、はずがいれき 秋の夜の、千夜も一夜と歎ち

りける。 坐しける。男大いに肝を消し、亭主に暇を乞ひ、奥へは下らずして、上方指してぞ上眉目の悪しき瞽女(瞽女・三味線を弾き、唄を歌いなどして銭を乞うて歩いた盲目の女。)にてぞみり、 てぜ がくて、夜もほのぼのと明け行く儘に、彼の女をよくよく見れば、其の姿あさましく、か

て料足(料足・銭。お金。)を取らせけり。これも欲深く、不得心なる者なれば、易々とすようそくを平に頼み候ふあひだ、才覚を以つて、彼の瞽女を此の川へ沈めて給はれ」とて、やがじ・逃がすものか。)、やるまじ」とて追つ掛くる。男これを見て馬方に言ふやう、「其の方じ・逃がすものか。) 頼まれ、彼の女を深みに突き倒し、さらぬ体にて帰りけり。 ある大河 (料足・銭。お金。)を取らせけり。 のか。)、やるまじ」とて追つ掛くる。男これを見て馬方に言ふやう、「其の方を渡りて、後を返り見れば、件の瞽女、杖二本に縋り、「やるまじ(やるまを渡りて、ぬと

え引力に見しば、そうまに)とすがでしまい。、「こう」は、こうである。 いっぱい ないでは 高いのでは 高いのでは 高いのでは できなくては 叶ふまじ」とて、戸を押し破り内へ入り、旅人の隠れてゐたる土蔵の中へ押し込なくては 叶ふまじ」とて、戸を押し破り内へ入り、旅人の隠れてゐたる土蔵の中へ押し込 泊まりなき由答ふ。そこにて瞽女、愈々忿りをなし、「いやいや何と言ふとも、此の内にの者の気色、世の常ならず、凄まじかりければ、頓て門を閉て、左様の人はこれには御かに敲き、「これに商人の泊まり給ふか」と問ひければ、亭主立ち出でこれを見るに、彼 夜明けて見れば、彼の男其の身寸々に裂けて、 かに敲き、「これに商人の泊まり給ふか」と問ひければ、 其の後商人は、日暮れければ、ある宿に泊まり侍りけるに、 首は見えずなりにけり。 夜半ばかりに、 を荒ら

高田衛編・校注『江戸怪談集(中)』(岩波書店、一九八九年)。

『諸国百物語』(延宝五年〈一六七七〉刊)

・ こうではともかくも仰にしたがひ申さん」といへば、男も日本国中あらゆる神ことさやうに覚しめさば一期の妻とも御さだめ候はんとの神かけてのせいごんにて候はことさやうに覚しめさば一期の妻とも御さだめ候はんとの神かけてのせいごんにて候はもなし。此うへは二世までもちぎり申さん心ざしにて候ふ」といへば、女云ふやう、「ま そひねをもゆるし給はらば、夜とゝもに御物がたりいたさん」といへば、女 云ふやう「いしのびて候ふ也。ひとへに仏神の御引きあわせにてもや候ふらん。ねがはくは御そばに候ふが、かやうの音曲 はいまだ都にてもきゝ侍らず。あまりたへがたく候ひて是れまで にしのび行きてみれば、灯(もなし。いとふしぎにおもひて、まづ詞(をかけてて、きくになか~~たへがたかりしかば、この男あまりになつかしくおもひて、 るに、つぎの座敷に女のこゑとして小うたをうたひけるが、そのこゑうるはしく京、よりあづまにくだる人、遠江の国見付の宿にとまりけるが、さよふけがいます。 てんとなり、「何とてさやうに御つゝしみなされ候ふや。わが身もいまださだまる妻とて なるこはねにて、はづかしさうにこたへければ、この男いよ~~あこがれ、 やしき我等が身として、いかで都「の御きやくにまみへ申し候はんや」と、 けるは、 京、よりあづまにくだる人、遠江の国見付の宿きゃう とをくみ みっけ しゅきゃう これ 一遠江の国見付の宿 御前の執心の事」とをくみ みっけ しゅくご ぜ しうしん いごんに入れ、 「是れにまします御方さまはいかなる御人にてましますぞ。 かやうの音曲 さもおそろしき神言をばさまか~のべてくどきければ、 にとまりけるが、さよふけがたの事な われは都のも をかけてこゝろみ 心もうちやう さもやさしげ やさしく のにて の座敷

夜を千させんと ごひもせずにげ出でてあづまのかたへ あとを見かへりければ、 見れば成ほどみにくき御前なり もあけがたになりて、 へのぼりければ、天りうのわたしにて、 べしと思ひ、ひつかへして都 とけてひよくのちぎりあさからず りなば、さだめてあとからお 男をどろき宿のてい 夜とあかしける。程なくその夜 かの御前あと のかた つかく いとま かほを けれ



内に、「あつ」と云ふ声きこへける。きぇどうこ、、うっちのなるけしきなりしが、蔵のば、かの女門の戸をけやぶりうちに入り、こゝかしことたづぬるけしきなりしが、蔵のといひて、門の戸さしてうちにいり、たび人を蔵のうちにいれ、さらぬていにてゐけれ人にあわん」と云ふ。ていしゆおどろき身の毛もよだちて、「いや此うちに宿とりはなし」しゆたち出でゝみれば、けしき人にかはりて、すさまじき女にて、「此うちに宿とりし都しゆたち出でゝみれば、けしき人にかはりて、すさまじき女にて、「此うちに宿とりし都 くれて宿をとりければ、夜半ばかりに何ものともしれず門をけわしくたゝきける。御前を切りころし水のふかみにしづめければ、男よろこびいそぎさきのしゅくにてきごぜ たべ」とて、船頭をたのみ、 よりをつかくる。 ゆき見ければ、 かの男を二つ三つにひきさきをきけると也。 男せんかたなくて「あとより来たる御前を切りころし、 脇差に金子拾両さしそへわたしければ、船でいた。 まんす 男よろこびいそぎさきのしゆくにつき、 すさまじきともいふばかり 頭よろこびかのどう して

太刀川清校訂『叢書江戸文庫2 百物語怪談集成』(国書刊行会、 九八七年)。

▼**『曾呂利物語』**(寛文三年<一六六三>刊)

巻二の十八「越前の国白鬼女(現在福井県鯖江市の日野川東岸に、 じょ)の舟渡しがあった。)の由来の事」 北陸道へ向かう白鬼女(しら

思へども、 をおもひ立ち、 かの出家、 と北陸を結ぶ湖上運送の要港。) の山上を祀る。 越前の国、 美僧なる故、件)、彼方此方を見物して、帰りがてに、かなたこなた。 のなだとなた のかなだしなん りょう りょう (を験道道場。現在白山神社と平泉寺に分離。) (現在福井県勝山市にあった天台宗霊応山平泉寺。白山 だん」というという。其の宿に、)の浦に泊まりしが、其の宿に、 の女、僧の閨 に行き、思ひ入りたる体なり。 女旅人ぞ泊まり合はせける。 若き時、 の大御崎(おおみさき) 古代から大和、 けしからずとは

申さん」とて、 さばさになって、 明け方に、 らんこと、 夜あけて、 、彼の女は巫女にて、年の其の夜は一所にぞ宿りける。 薄いさま)の訛か。)さも凄まじき姿なり。 何にも迷惑に思ひければ、「ここに逗留かしのでいまり(原文仮名「まとり」を正す。) (不詳。 地名であろう。) 年の程六十ばかり、 ふ所まで逃げのびぬ 髪すぼに(不詳。「髪すぼみ」 則ち、「い にぞ着きにける。 し侍らん」とて女を欺 づくまでも御後を慕ひ 女房伴ひ寺に (髪が ば

と云ふ 方此方尋 りの深みにて、 巫女の事なれば、 。僧、「此の上は力なし、さらば同道申さん」とて、未だ夜をこめて立ち出で、 ぬれば、 ままれて引き寄せ、其のまま淵に沈め、平泉寺をさしてぞ帰りける とてもそなたに離るる身にてもあらばこそ。 、大きなる木の空(ば、数珠を引き、神ト (木のてっぺん。) に屈みゐたるを、「さてもさても情 しして占 ひもてゆくほどに、やがて追ひ 命の内は離れまじきも つつき、

に逢はん」とて、 くたびれける儘に、 寄り得ず。 りけるに、 脇差しの有りけるが 察へ行きて見れば、長十丈ばかりなる白き大蛇、 としてか持たれけん、 まづ我が寮に入りて昼寝をし居たり。師匠の 己れと抜け出で、 新発意、 彼の大蛇を切り払ふ。 家に伝はるとて、)坊、「新 吉光 新発意を呑まんとて これ故大蛇左右な (桃山時代の名刀 発意帰りたる

さりける。 彼の吉光を常々望みの有るに、 の体を見て急ぎ帰り、 人々をして新発意を起こし、 また 奇 き ど く (あらたかな霊験。) を見ければ、 都の物語りなど申 愈々欲しいまいよ 欲しさぞま 師匠、

白鬼女と云ふは、此の謂はれとぞ申し侍る。はくき じょ いんの 儘に寮へ押し入り、彼の僧を引き愛蛇思ひの儘に寮へ押し入り、彼の僧を引き愛 匠も黄金作りを持たれけるが、 彼の僧を引き裂きて、 いろいろ云ひて、 やがて食ひてげり。 吉光に換へて取りた それより彼の所を りけるに、 大

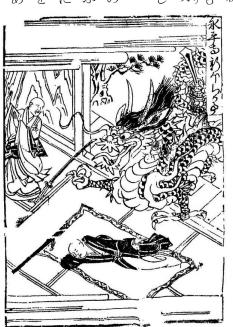
高田衛編・校注『江戸怪談集(中)』(岩波書店、 一九八九年) より。 便宜的に各話に番号をつけ

諸国百物語』 (延宝五年〈一六七七〉刊)

の国永平寺の新発意が事」

巻一の十三「越前 さすがに岩木ならねば、その夜は一所にいねにけり。のねやにしのび行き、いろ~~とたわぶれければ、新 けうをさましてゐけるに、 とまりぬ。 ぼり、 なる女神子にて、 あひ宿ど 京中のめ ~にて一所にふしける。新してゐけるに、かの女、「い に女たび人ありけるが、 平寺と云ふ禅寺にとし□ □ (ごろカ) いしよきうせきのこらず見物して本国に帰るとて、 かしらに雪をいたゞき、 づくまでもともなひ申さん」とて、 此新発意のうつくしきをみて、 なる美僧 さながらうるさきすがたなり。新発意も 新発意も心ならずはおもひながら、 夜あけてみれば、 のありけるが、 夜ふけて新むかい河のう のころ六十あ あとをした 発 発 意 た に V

とて、 のとが 発意おもひけるは、 なひて寺 所まで行きの て、「けふはくたびれたれば逗留 てとまり ぬもいか かの女をい へかへりなば、師匠の御坊ひけるは、かやうに女をとも V いで、 ゞあらんとめいわくし ・つわり 道す しらきちよと云ふ て、 て女大きに その夜 l せん」 \mathcal{O}



れける。 きなるくち木の洞にかべとをおふて行くほどに、 るねしてゐける。 うちより水底につきをとし、 づくまでもめ げられしが、 ていにて新発意をおこし、 ともない出でゝ行くほどに、舟わたしにて舟にのり、沖なかにこぎ出だして舟のまでもめしつれられよ」と云ふ。新発意もちからおよばず、「さあらば同道申さん」らち木の洞にかゞみゐけるを見つけ、「さても~~つれなき人や。 いのちのうちは のわきざし有りしが、 このわきざしをかへけるゆへに、そのゝちくだんの大じや又来たりて、 と引きさき ばかりなる大じや新発意をのまんとするところを、枕もとに家につたわりたける。師匠、客、殿に出でて見給へば、新発意のひるねをしてゐける所へ、そ底につきをとし、永平寺にかへりて、あまりにくたびれたりとて客、殿にひきこ これをとりいだし、しんぼちをたぶらかし、 をあざけりける。 くひころしけると也。此新発意師匠 しらきちよにつきて、かなたこなたと尋ねけれ そのころなにがしのはてられて、金っくりのをのれとぬけ出で、かの大じやを切りはらふ。 くだんの吉光とかへてとら ゆへにいのちをうしなひ つくりの脇差を寺へ 新発意は大 新発意 さら

太刀川清校訂『叢書江戸文庫2 百物語怪談集成』(国書刊行会、 一九八七年)。

平仮名本『因果物語』(寛文年間<一六六一~一六七三>刊

我はしなの かたらひて、 しなのにてかたらひける女、跡を追てするがに来り、かやうの 夫出合て、 にふ ちう あんない きつねざき の近所の者、信濃に行て逗留「執心ふかき女の虵に成たる事」しなの とうりうへび ゝ者なるが、 彼女をよく! するがの本妻、此由を見て内に逃入、夫。に此よしをふかき約束ありてこれまでまいりたりといふ。その姿を すかして家によび入て置けり。 はどへてのち、するがの国の故郷へ帰りけるに、かほどへてのち、するがの国の故郷へ帰りけるに、か のあひだに、 人は此家におはするや。 ある女房を V まこと \mathcal{O} けれ

れは、 案しけるは、 、かの女を海へつきはめしに、即 時に虵に成て、夫の腰 にまとひ付て、ある時三保の松原みせんとて女を伴 ひゆき、いざや舟あそびせんとて沖** でしに、案のことく不動坂にて、 「 はなるゝ事も有べしとおもひるは、高野山は女人結界の山なれば、若はなるゝ事も有べしとおもひまめいわくして、取てすてんとすれどもかなはず。更にすべきやうなし。 とおもひ、 つよくしめけ へ舟をこぎ出 つらし 野に

沖中まで争とすべい。近江の国やばせの渡し舟にのりて、に、近江の国やばせの渡し舟にのりて、たいかがかります。 オーなく故郷へ帰れ はさりとも執心 かず。舟かたも乗合の 中まで舟を出したれは、 て、不動 坂 を越 る心 もきれんと思ひ、 三年の間山に居て、今 跡に留まる。 なく故郷へ帰る 此舟更にう るに、 夫う 故郷



慶長、十七年の事なり。 ではいちゃう はめけれは、舟は子細なく岸に渡っつきけり。非分の所為、三年の間にへ突はめけれは、舟は子細なく岸に渡っされば、ひょうでしたでつきましき事は聞及はす。誠にふびんながら、数 多の人の命には替 かたしとて、ましき事は聞及はす。誠にふびんながら、数 多の人の命には替 かたしとて、ましき事は聞及はす。誠にふびんながら、数 のかたちみえけり。人 (人) 申すやうましょす。 も ま の腰太くして、蛇のかたちみえけり。人 (人) 申すやう いたしけれは、彼夫の腰太くして、虵のかあやしみて、いかさまにものり合の衆の中に、 子細ある御方有へしとて、 三年の間に 1申すやう、 に報いた。 な状で、 なおっと を、 を、 を、 を、

『浅井了意全集 仮名草子編』 四巻 (岩田書院、 二〇一三年) より。

片仮名本『因果物語』(寛文元年<一六六二>刊)

巻上の五「妬み深き女、死して男を取り殺す事 付 女死して蛇となり男を巻く事」

と云ふ者、信濃善光寺(寺名ではなく地名。と云ふ者、信濃善光寺(寺名ではなく地名。越後の国、大沼郡(魚沼(うおぬま)郡のこえちご おおぬまぐん イビ(魚沼(うおぬま) 郡のこと。 新潟県南部の山岳地帯。)の代官、吉 田作 兵(魚沼(うおぬま) 郡のこと。 新潟県南部の山岳地帯。)の代官、 ましだ さくびよう 現在の長野県。) の者にて、 妻子を善光寺に置き

けるを、近所の者共、宥めて押へければ、力無く止まり、朝夕是を恨みけるが、身心日本妻後に聞き付け、大ひに腹立ち、「大沼へ行き、此の恨み申すべし」と、狂ひ走り出でほんきいのち。 とは作兵衛、内通にて走らせ (下女と密通して、彼女を出奔させ。)、大沼へ呼び寄せ置く由、けり。 或時、妻、召し使ひし下女、失せ去りぬ。

件 の様子を引くこと。 作兵衛手代 (代官の下役。)、武兵 衛と云くだん 作兵衛手代 (代官の下役。)、武兵 衛と云くだん で だい ぶ ひょうえ ない衰へ、重き病と成り、今を限りの時、 妻女、答へて云ふ、「自らが煩ひ、別の子細にあらず。作兵衛に斯様々々の恨み有いの様子を聞きて驚き、早速に参り、「御気色」如何」と問ふ。 おんき しょくいかが と問ふの下役。)、武兵 衛と云ふ者、幼少より作兵衛夫婦に養育せられける故、作兵衛手代(代官の下役。)、武兵 衛と云ふ者、幼少より作兵衛夫婦に養育せられける故、

るに付いて、今斯かる体と成りたるぞ」と語る。 恨み有

りようけん 也」と、打ち嘆きて深く頼みける故、 を持ち来たり、自ら存命の内に、一目見せて給へかし。左なくんば相果て、後世の障りなきや」と申しければ、妻女云ふ、「願はくは大沼の手掛け(妾(めかけ)。)を殺して、首武兵衛、「さてさて、是非なき御事かな。思ひ召し置かるること(残念にお思いの事。)

り難や。我等頃、如何ばかりか瞋恚(怒り恨むこと。)を燃やし、遣る瀬なく、苦に沈み反らし、いきり立つこと。)に成りて、大いに悦(び、につこと咲ひて、「さてさて嬉しや有首を執りて善光寺へ参り、「かく」と申しければ、女房がばと起き上がり、居長高(背を) はせ拝み、 しに、其の方の蔭にて、今こそ妄執した。キャルが、中では、もうしゅう 簡に及ばず、大沼へ行き、作兵衛留守に、 解けて、 心晴れやかに成りたり」と云ふて、手を合 彼の手掛けを賺り き上がり、居長高(背なし出だして、刺し殺し、

かなか怖しき体也。 気色変は り、 其の 儘喰ひ 付 髪の毛を拽きかなぐる有りさま、 な

武兵衛是を見て、「夫は余りに浅ましき御事 也」と云ふて、 首を奪ひ、 取り捨てて、

に死す。

れども其の妄念、 妄念、形を顕はして 気色次第に衰へ、 はして、 大沼へ行くと云ふて馬に乗り、 作 -兵衛門

後右の通り慥かに語る。 しなされたるよ」と驚きければ、 其のまま消え失せし也。其の時、 一目見て肝を消し、 「善光寺の上様、 馬に乗せたる者、 御^{おんこ} 其の

さて作兵衛、伏せりたる処を、 其の儘消えてなし。 彼の女房、来たりて首を締む。 作兵衛驚き起き上が りけ

の目にも見ゆる也。作兵衛、 首をしめけるに依つて、 畏ぢ恐れて、 ぢ恐れて、此彼 に宿を替え様々に弔ひ祈りけれども叶! に宿を替えけるに、 けるに、結句作兵衛より先にはず。昼夜倶に家に居て、人

何ともせん方なく、行きて顕はれ居る也。 て隠れなきこと也。 作兵衛煩ひ付き終に死去する也。 其の子、 今越前にあり、 越後に

第永年中(一六二四―四四年。)、大原(京都市左京区北部の地名。近世では出寛永年中(一六二四―四四年。)、大原(京都市左京区北部の地名。近世では出寛永年中(一六二四―四四年。)、大原(京都市左京区北部の地名。近世では出寛永年中(一六二四―四四年。)、大原(京都市左京区北部の地名。近世では出寛永年中(一六二四―四四年。)、大原(京都市左京区北部の地名。近世では出寛永年中(一六二四―四四年。)、大原(京都市左京区北部の地名。近世では出 近世では出家の隠栖所が多か 大工にて京に居ける時、

是を取り捨てけれ ば、 亦ま

唱えてもらい、仏との縁を結ぶこと。)を授かりて、久しく念仏しければ、 地にあった。) 権誉上 人を拝し、一々懺悔して十念(僧から南無阿弥陀仏の六字の名号を十遍ひを巻きて居けり。数年経て後、上京 相 国寺の門前、報土寺(浄土宗。寛文六年まで同悦 び、三年居て下るに、本の坂にて、蛇又頸に巻き付きたり。人々怖れを作す故に、手拭処に、不動坂(高野山の麓にある。その先が女人禁制の聖域。)にて蛇失せけり。 たりと也。 後に高野山 いつと無く蛇失せ へ登る

河に帰りけり。

頓て蛇と為りて腰を巻く。何程切りても亦た巻くに依りて、為ん方やがの松原へ伴て行き、舟遊びして海へ入れて殺しけり。し。駿河の女房(男の本妻。)、是を見て逃げ行き、夫にかくと云ふ。夫、し。駿河の女房(男の本妻。) 。駿河の女房 (男の本妻。)、是を見て逃げ行き、夫にかくと云ふ。夫、彼の女を賺し、三保は州の女房 (男が信州で妻としていた女が、跡を追ってやって来た。) 来たる。 其の有り様怖

山。)へ行きて居たると也。 為ん方無くして、

高田衛編・校注『江戸怪談集(中)』(岩波書店、 一九八九年) より。 便宜的に各話に番号をつけた

▼桜花軒『好色百物語』(元禄十四年<一七○一>刊)

巻一の二「女 執心蛇になる事」

舟を出させけるに、 に出しを、 つかひて、「ひそかに舟出せん」と、ないひなたむれとも、聞も入されは、 からすこゑのかきりに泣ける。 うちしたひ、纜 われを捨置給へる物かな。 「ともにゆかん」といひしを、 、守殿とかやの国に下りて三とせ有し間。 足すりをして其まゝ倒伏、人目も憚む出させけるに、おんな血のなみたを流なかった。 給はり都に登らんとせし折に、w#た# みやこのff てめしつかひける。もの数の女を置てめしつかひける。 伊奈なにかしは能役者にて、 女あとより来りて、「つれなくも にとり付しを打払ひて、 うらめしや」と さまり く の方を かた かた かん すて 女も に

けるに、いつとなく袖の中にはなれやらす。を、さくりて見れは蛇なり。驚って打すて行船中にて、袖の中しとゝにおもく覚へしっぱんよう。男はこゝろつよくも追手にまかせはしり

し を 焼 き 是みよ」とて、袖の中より取出しけれは、 とにおそろしきことならすや。 とい侍しに、「今は何をか隠し侍らん。国かたにてかゝる事有しか、 かな。其国にてはさもあれ。 またの秋のころ、国に下りしに、おんなのことを尋ねしに、「去年の其月其日その

たっ
たっ
こと 死しける」とかたりし。おもひ合すれは、 につきしかと、こゝろ重く見えて物思ふさまなりしを、 かしらをつきつらぬきて捨けるより、 みつからかくて有所、へ来れることは何事そ」と、鉄火は出しけれは、妻女蛇にむかひ、「おのれは道にたかへるもの へひをころしけるその時にて侍りし。 又もきたることなし。 しか、蛇となりて来れる。つまもいふかしく思ひて、 まこ 時に

*吉田幸一編『怪談百物語』(古典文庫、 し、会話・心中語には「 」を付した。 また、 一九九九年)より。 改行を行い、 句読点・表記を改めた箇所がある。 一字分空白としている箇所は句読点に変更 画像は

▼神谷養勇軒『新著聞集』(寛延二年<一七四九>刊)

第四「報仇篇」九「奴婢を禁獄し蛇に変じて命を奪ふ」

する者には侍らず」と、 りしに、下女が密夫、その夜、来りしをしるべに、奉行所に訴へしかば、 江戸久右衛門町に、 佐久間町三丁目金兵衛といふものなり。 紺屋佐太郎といふ者あり。 かたく申たてゝ預りぬ。 或夜、 件の女のみ、 これが主人、「此ものは、 ぬす人に逢、 拷問にかゝり、 家内の穿鑿い 問状にか さある事、 つらき責、 . ゝる。 みじか

しかば、囚獄司より、 「盗人に負とは此事也。死なば死ね」と取り合ざりしに、 かおくべ に重り煩ひしを、 寺に送りし。 と仰られしかど、 主人に看病すべしと宣ひしかど、 「猶もその事いま~~し」とて、 佐太郎が妻、 終に籠死したりしを、「死 耳にも 以てのほか 聞入ざり に順

終に身まかり るしみけり。 憂事におもひ、 その比、 佐太郎が妻いたはりしが 蛇を殺して捨れども、 し死骸を沐浴させけるに、首に蛇の 家を出、 発心修行の身となりぬ。 又次の夜は来り居るなり。すべき事なくもて扱しが、 夜 々 行灯 まとひたりしを、 のうへに、 蛇蟠まりし。 夫見るより、 そ の時 は 身の毛て 殊にく

* 『日本随筆大成 第二期五巻』(吉川弘文館、 一九七四年) より。 改行を行 V) 会話 心中語に は

谷養勇軒『新著聞集』 (寛延二年<一七四九>刊

第十二「冤魂篇」十四 「妻の魂追来りて国に帰る」

におぼえし。 なりしが、 伊予国宇和群伊達宮内殿鞍ばしり藤次郎、江戸にて妻、 幽霊眼前に見へて、「など我をすてゝ、 妻をむかへし其夜より、 に来りし」といふ。余人の耳には入らざりしかど、 気力つかれて、本国に帰り度と願ひ、 其者、 国に着しに、時々霊の来り、 前妻の幽霊来り、 下向したまふぞ。 関船のたよりに乗て、明石迄来りしに、 終に取殺してけると也 咽より手足迄しめけるに、 身まかりて後、 船中何となく、 我は江戸に用 三十日ば 日来勇なる者 有ておそなは 上より押やう

『日本随筆大成 第二期五巻』(吉川弘文館、 一九七四年) より。 会話・ 心中語には を付 た。

未達『新御伽婢子』 (天和三年<一六八三>刊)

巻三の五「両妻夫

此所に、武右衛門とかやいふ男、其かたち斗残りて、人家の後にある。 にあり。 あり。号で、人俊成卿。 通 事一年を八分にして、 通 事一年を八分にして、 がよぶ ねん がまる しま かよる は にぬのたまつ しまを勧請 し が の玉つしまを勧請 し し給ひ し地あ り。 今は

江戸に通す て、 二分なら ては京に住

出向ふと夢にでむから(マア)と夢にでもから(マア)道を送せにだに及ばず。 なりし中なれば、 にもはなるゝ隙を悲しみ待わび、 なり妻と成りては、 がてに思ひなげくならひなるを。 ふやう、「常の人の契す。子ひとり持てり。 分道を送りて、 と夢にうつゝに思ふぞや。 の人の契りには、夫とか持てり。此婦、夫になった。 十と世契りても三と 君東あっ 一時片時の程だ へおもむき給 又半分道に ゆき カコ



打恨らみ たるさまにしみかーとかたるに。 男、 いと能事請して、 亦東に 下 ŋ

き」と戯れそめし中なりし。然るでる妻ありといふ事を深く密し、「寡した」といいます。 ッえて、都は花と愛し、東の家はえびすなどゝ呼とかや。去人の知せしぞや。ッえて、都は花と愛し、東の家はえびすなどゝ呼とかや。去人の知せしぞや。れそめし中なりし。然るに、此女、武右衛門に託「て「我殿は都にて我が身ご 爰にも馴染女房在て子ひとり持てり。 はなる我なれば、終には江戸に引越て必二人住がなる我なれば、終には江戸に引越て必二人生のますが、のましているのでありますが、房在て子ひとり持てり。此女に詢し昔、京に定の方でである。 て下るへし。必」といひ捨、とかくに袖を引はな 2はり、偏に鬼面のごなきものさへ侍れば、 京に思ふもの 「我も左こそ 思ひ給

いつしか女追つきて右の腕の偽。。いづち放してやるoversoo 「さる

にて不いなは か爰を放さん」と、腕を持て引たつる。男、 心得たり。夫が我をうとみ果て、此女にいはするよな。よし人 の女いきまきて、「己」、いづちの何者にて、其虚言をかまふるそ。 に報 へし」と、わなゝく声の地にひゞく。 あやしく互に嗔詈声、(言+堯)々として喧かまひす。 しゃう たがひ いかりのふしる しゃう かまひす かまひす かまひす。 都のかたへと諍 ひ引。 けず。 都のかたへと諍 引はなさんと悶絶ども、 ひ引。其足音、 大山も崩れて地に入り、金剛力士のごとく 一たび取付て、 いや に入 争い

にまのあたり来りけるこそつみ深けれ。 えしが、かきけちて失ぬ。京の女の夢 うつゝに半分道を行といひしが、はたして爰 次第につよく引けるほどに、男、ふたつに引割けるにぞ。おんな、東西へ別れ行と見しだ。

たらひけるに。此妻、さらにうらみたるけしきもなく日かずふるまゝ、秋の夜のなか いと」ねられもせす。ともしびか」えがちにゐる折しも、 我もしかなきてそ人にこひられし今こそよそに声はきけとも ある男、 妻に心た(ママ) しうすくなり行けれは、 妾といふものを置てわ しかの音の聞えけ りなく れ

さをなしけり。詩経には螽(斯+虫)[いなこ]の篇 とすさみけるを。男、はづかしくて妾ををい出し、 ゝる貞なる心こそなからめ。 女たらんもの、 つたへてもつゝしみおそるへき事にそ。 女のはかなき心から、 昔にいやまさり を作りて、 かくおそろしく、 ね て契りけるとそ。 たみをい あやしきわ

句読点・表記を改めた箇所がある。 『新御伽婢子』(古典文庫、 一九八三年)より。 左訓は「 会話・心中語には を付 した。

物語』(寛文三年<一六六三>刊

常に彼の比丘尼寺に出入りしけり。 の国、善光寺の内に、比丘尼寺・九「耳切れうん市が事」 ありけり。 また越後の国にうん市いた と云ふ座頭 はべ

云ふ。 丈に入りぬ。 して打ち絶えけるぞ」と云ひければ、「久しく所労の事候ひて、御見舞ひも申さず候」と して、彼の寺に行きけり。 ある時労 はる事 兎角 して、 其の日も暮れければ、「うん市は、客殿宿られよ」と云ひて、 (病におかされること。) 有りて、 主の老尼、「うん市は遙か 半年程訪れざりけり。 (久しぶり。) にこそ覚ゆれ。何と 少し快・ 老尼は方

と云ふ。うん市は死したる人とも知らず、「それへ参るべく候へども、御一人坐 します所うん市の臥したる所へ行きて、「其の後は久しくこそ覚ゆれ。いざ我々が寮へ伴ひ侍らん」爰 に、けいじゆんとて弟子比丘尼あり、三十日程さきに身まかりぬ。かのけいじゆん、 の寮の戸を内より強く鎖して、明くる日は外へも出ださず、さて暮れぬ。の寮の戸を内より強く鎖して、明くる日は外へも出ださず、さて暮れぬ。えこそ参るまじ」と云ふ。「いやいや、苦しうも候はず」とて、是非に引き立て行く。 へ参り候ふ事は、 如何(男女同室の禁制の手前、いかが どうかと思われます。)にて候ふまま、 します所

辺りを探りまはしければ、 んまま、あなかしこ、よそへ出づる事あるまじ」と云ひて出でぬ。さて如何して出でんと、 「冥契に」(深いちぎり、 うん市、気詰まり、如何すべきと思ひながら、すべきやうもなし。めうけつに 朝夕行われるが、 じゆんは帰りぬ。 ここでは夜の勤行。)の鐘の音しければ、 の意)か。)行事 いかにも厳しく閉ぢめければ、出づる事もならず。 (原本「ぎやうし」。 意によって改。 「行事に逢ひて帰り候は 夜明けて、 勤行のこ (不詳。

口を蹴放 し見れば出でけるうちに、 て侍る」と語る。「けいじゆんは三十日ほど前 に身まかりぬる」と云へば、愈 々 興覚め「如何に、如何に」と問へば、如何にも疲れたる声にて、息の下より、「しかじかの事に 居てこそ侍れ」と云ふ。見れば臠 てぞ覚えける。 何か に、 くする事二夜なり。其の中に、 寮の戸を荒らかに叩 き呼ばはりければ、則ち寺中(の者出で合ひ、戸夜なり。其の中 に、食ひ物絶えて、迷惑の余りに、三日目の暁、行事に 少しもなく、 骨ばかりにて、 さも恐ろしき姿なり。 尋ねければ、「爰に

る。各 鐘うち鳴らし踊 を百万回となえる行事。) り合ひ百 万遍の念仏(災厄や病気うん市が怨念を払はん為とて、寺中寄 をはらうために、大勢が集まって念仏 はし出で来たり、 一つは、 何処ともなくけいじゆん形を現 。念仏の功力に因り来たり、うん市がな じゆん弔ひの為、 に因りて、 膝を枕にし っければ、 又は



うん市とて、年長くるまで越後の国にありしとぞ。て、引き千切りてぞ帰りにける。さてこそ甲斐なき命助かりて、本国へ帰りしが、耳切れで廻し、耳に少し陀羅尼の足らぬところを見出だして、「玆 にうん市が切れ残りたる」とはりしが、うん市を見付けて、「噫 可愛や (かわいそうだ。)、座頭は石になりける」とて撫恐ろしき有り様にて、彼の寺に来たり、「うん市を出だせ出だせ」とののしりて、走りな の功徳を説く陀羅尼。)を書き付けて、仏壇に立て置きぬ。さる程に、けいじゆん、さも「さらば」とて、有験 の僧数多寄り合ひ、うん市が一 身 に、尊 勝 陀羅尼(尊勝仏頂どに、ある寺へ立ち寄り、長老に会ひて、「しかじかの事侍り。平 に頼み奉る」と云ふ。 かかる隙に、うん市、枕を外ばす 道すがら、 いかにも身の毛よだち、後より取り付かるるやうに覚え、行き悩みけうん市、枕を外し、「はや国に帰り候へ」とて、馬を用意して送りぬ。 より取り付かるるやうに覚え、行き悩みけるほ

*高田衛編・校注『江戸怪談集(中)』(岩波書店、一九八九年)より。